

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集: 愛宕町教会・総務部 発行者: 北 紀古 発行所: 甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyukai/>

みことば

エデンの園に住まう

聖書 創世記第二章十五〜十七節

牧師北 紀吉

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませた」とまずはいわれていきます。私共人間が主なのではない。神こそが主であられることをまずは覚えたい。主なる神が人をエデンの園に住まわせてくださったのです。私共人間が、楽園を作るのではないのです。神を主とすることで楽園があるのです。

★ ★ ★

エデンは「楽しみ」とのヘブライ語から来ている言葉ということです。ですから、エデンの園は「楽園」を意味していると言つてよいでしょう。しかし、楽園といっても何もしないで飲み食いして楽しむということではありません。それは浪費です。そこに楽しみはない。神は

言われるのです。「耕し、守るように」と。耕し守る、農業をするということでしょう。確かにエデンの園は、園のどの木からも取って食べなさいといわれているのですから果樹園のようです。そうであれば、耕し守ることは農業ということになります。しかし単に農業というのではなく、すべての労働をも意味しているのです。神は人に耕し守れという。神は人に労働を与えて下さったのです。労働を人の本来なすべき分としていただくたのです。神は人が労働することを、人のあるべきこととしていただくたのです。

★ ★ ★

しかも神は、人が耕し守った果樹のどの木から取って食べてもよいというのです。ここには大きな恵みがあるのです。古代オリエントでもギリシャでも労働は奴隷の仕事とされてきました。神々のために人が労働し、その収穫を神々が楽しむのです。あるいはギリシャでは主人が奴隷を働かせてその労働の成果を楽しむのです。いずれも労働は奴隷の仕事としてさげすまれていたのです。しかし神は労働を恥ずべきものとはしない。また神は人を働かせて得た果实を自分が楽しむとはしない。そうではなく、人が労して得た果实は人が取って食べてよいのです。人は神が与えてくださった大地で働き、その実りを自分が食べて楽しむことが出来るのです。神は人が自ら働いて得た実りを自分で楽しむことをよしとしていただくたのです。神の下にある労働は感謝となりま

す。自らを主とし、自らの利を追求する労働は苦しみとなり、人を搾取する傲慢となります。

★ ★ ★

エデンの園とは、労した実りを自分のものとして楽しむということなのです。神は、人が労したものを人のものとしていただくた、そのことで私共は神の恵みを知るのです。人を主なる神が奴隷としてではなく、実りを楽しむことのできる存在としていただくた恵みを知るのです。自らの働きを楽しむ、そこに人の自由があります。

★ ★ ★

神は、人に自由を与えてくださった。それが、「園のすべての木から取って食べなさい」との主の言葉です。だからこそ主なる神は言われるのです。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」と。ひとつの禁止がある。それでは自由がな

いではないか、と思われるかもしれませんが。そうではありません。一つの戒めがあつてこそ、本当の自由があるのです。自由とは、勝手気ままでもなければ、好き勝手ということでもありません。自由には責任が伴うのです。自立した人間としての行動に責任を持つ。それが自由人ということ。何でもよいというのではないのです。「食べるな」との戒めがなかったなら、人がどの木から取って食べても何の意味ももたない。彼の意志が働いてはいない。彼はただ気ままに取って食べているだけで、神の言葉に責任を持つて答えるものになってはいないのです。

★ ★ ★

「食べるな」と言われて、はじめて主体性が生じるのです。一つの戒めを神が下さった。それは、神が人を命じるままに行う機械として作られたのではなく、神の言葉に主体的に答える自立した存在としていただくた恵みの言葉なのです。戒めがあつてはじめて人は、自らの責任で従うことも、従わないことも出来る責任主体となつたのです。

★ ★ ★

神は人に一つの戒めを下さつた。人が自由人として、自立して神の言葉に責任を持つて答えることの出来る人格ある存在としてくださったのです。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



吉見 貴美恵

ワタシの実家は、仏教徒です。教会やキリスト教なんて、かわりないものだと思うって成長しました。

しかし、高校進学の際に、いきなり関わりができました。

ワタシは受験のさい、家に近い地元の公立高校を希望していました。しかしその年、志願者が多く、希望した高校は、その時のワタシの学力では落ちてしまい、初めての挫折を経験することとなったのです。

すべり止めに受けていたのは、キリスト教系の高校でした。両親は、まさかワタシがキリスト教系の高校へ通うことに

なるとは、思っていませんでした。たいへん悪いイメージを持っていました。

とはいっても、中学浪人させるわけにもいかず、公立高校へ合格しなかったのだから仕方ない……としぶしぶ了承し、ワタシ自身も、本来希望した高校ではなかったもので、かなり不本意な高校進学でした。

その結果、横浜学院女子高等学校という、日本基督教団の私立高校を卒業することになりました。ワタシはここで初めて、毎日、礼拝をまもり、聖書をひらき、お祈りをし、神さまについて学んだのです。

入学前、キリスト教に対するイメージがとても悪かった両親でしたが、高校生活をこの学校で送ることによって、かなり理解が進んだように思います。

卒業後、短大に進学し、横浜中央YMCAで、プールとキャンプのリーダーを経験しました。横浜指路教会や磯子教会など、教会も短い間ですが通っていたこともありました。

こんなにも、神さまに導かれて、聖書を聞く機会にも、教会へ行く機会にも恵まれていたにもかかわらず、この十数年間は、教会へ行けないうちの皆さんの理由を盾にして、神さまと離れた生活を送っていました。

おかげで、常に自分を中心にして、自分自身の存在意義を問わなければならぬ、辛い生活でした。なぜ、辛いのかすらもわかりませんでした。

そんなワタシなのにもかかわらず、神さまは覚えて下さっていました。

教会へ再び足を向けるきっかけとなったのは、当時三歳であった娘が切に願ひ、実現したピアノレッスンです。

教会員である小出知子さんは、娘とワタシのピアノの先生です。

知子先生が、二〇〇三年のクリスマス礼拝へ私たちを誘って下さいました。お誘いをうけて、本当に久しぶりに教会へ足を運びました。

その翌年、CSクリスマスで作るクリスマスケーキに娘が惹かれて、CSのクリスマス礼拝へも参加することになりました。

娘にとって教会が、だんだんと楽しい場所となりました。讃美歌を歌ったり、友だちとも遊ぶことのできるステキな所になっていったのです。

「教会は楽しい！ また行き

たい！」

この言葉に助けられて、教会へ行くことに反対だった夫が、次第に折れて理解を示してくれるようになりました。そして、少しづつ主日礼拝へも通えるようになりました。

ワタシは、成人して結婚しても、ずっと困っていたことがありました。

ワタシの考えや、行動において、幼い頃から常に否定したがる母のことです。幼少期における、母からの否定の言葉は、自分の存在をも、全否定されているようで、たいへん辛いものでした。

大人になっても、母に認めてほしいと願う気持ちと、ワタシの存在って、いったい何なんだろう？と自分の存在意義を探していたのです。

受洗にあたり、教理の学びがすすむにつれて、今までワタシを呪縛していた「ヒトに認められること・よく思われたい」という気持ちが、あまり重要性を感じていなくなっていくのを感じています。

今まであった、母に認めてほしいと言う気持ちは、ワタシを受け入れることができない母がいる……ということ、受け入れる気持ちへと変化していたんです。

この変化は、こんなにも罪深く、弱いワタシなのにもかかわらず、十分に神さまに認められ

ていて、十分に愛されていることを感じ、学ぶことのできるワタシへと神さまが導いて下さったからです。

「イイヒト」や「立派なヒト」でなくともいいんだ。

ワタシは、ありのままのワタシで、神さまに導かれた生活を送っていけばいいのだということを知りました。

なんと、すばらしい毎日なんだろうと、ココロの重荷がおりた感じがしました。

ワタシは、これからずっとこの先も、神さまを信じ、神さまの御言葉に従ひ、祈りある生活を送っていきたいと思っています。

(二〇〇七年二月四日、
主日礼拝にて受洗)



証・感話

2006年6月22日 祈祷会

証詞

神の恵みに生かされて



中嶋 長續

【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴ひ魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまらるう。

(詩編二三編)

私は、北杜市須玉町増富に生まれました。甲府から遠く離れている山村と家が貧しかったので、高等小学校を卒業するや、昭和十二年六月、東京・神田のクリスチャンである武藤膳写真印刷店に見習奉公に入りました。動

機は勉強したい希望と、私の長姉が出席していた愛宕町教会の開拓伝道時代に在任された神山良雄先生と松田花子先生の紹介で就職したのです。主人に早速神田小川町にあった(元)ホーリネス派の神田中央聖教会(牧師は車田秋次先生)に連れて行かれて以来、毎週聖日の夜の伝道会に出席するようになり、十二年十二月二四日のクリスマスに洗礼を受けて会員となりました。

店は第一と第三聖日が休業日であって、私は午前八時半に出席し、午後は主人から渡された旧制中学の国語教科書を五年間分を勉強する為に九段下にあった有名な大橋図書館に行き二時から五時過ぎまで勉強して、夜は再び伝道会に出席するということを繰り返しておりました。又十五年四月より、麹町青年学校の朝間部に入塾して、毎週月・水・金の朝七時から十時まで、軍事教練と共に商業簿記等を勉強しました。お陰で大学生の同人誌や農林省や鉄道省の印刷物の校正等も出来るようになり、六年間勤務しましたが、第二次世界大戦で応召した為に店を退職して南方の北ボルネオに陸軍病院の衛生兵として従軍して行きました。

神田中央聖教会では、毎週路傍伝道に青年会員が出まして、小川町の繁華な通りで立証をして通行人に呼び掛けました。太鼓やタンバリンを鳴らして「神は愛なり」と記した手下げ提灯を手持って行ったのですが、ある夜酒に酔った人が「何が罪人だ！俺らは何も警察に引つ張られるような悪い事はしてないぞ。先刻から聞いていると手前達は良い気になって俺達を罪人呼ばわりしているが、俺が毎晩飲んでいる酒も自分が働いた金で飲んでるのだ。ふざけちゃいけねえぞ！馬鹿野郎！それにキリスト教なんていうのは毛唐の信ずる宗教だ。日本にはちゃんと昔から仏様や神様があるのだ。この非常時に敵国の宗教を信じて宣伝する馬鹿者があるか？手前達いつまでもしやがっている」と皆殴り飛ばしてしまふぞ。馬鹿者達め。アーメンソーメン冷やソーメンめ！」と怒鳴りながら私達が持っていた提灯を奪い取って二、三個燃やされてしまった。

このような妨害が度々あったが私達は中止することなく毎週続けていたのです。教会に戻って七時半から集會が始まると、私は毎週のように立証を指名されたもの

でした。

然しこのことは私の信仰の益々励ましになって、昭和十六年に教会が弾圧されて集會ができなくなると私は九段のメゾヂスト教会に主人と共に出席しておりました。

従軍する時に新約聖書を持って行き、或る時軍隊で所持品検査を受けましたが、隊長は「お前はクリスチャンか？まあいいや」と言って注意することもなく所持を許されました。

昭和二三年愛宕町教会に転籍し、長い信仰生活の中でいろいろなことがありましたが、既に愛宕町教会の三〇年誌や五〇年誌、それに鈴木先生の追悼記念誌等に発表したことは省略しまして、私の生涯で三度も死の危険から救われたことを記してみたいと思います。

第一回は戦地で敵潜水艦に輸送船が撃沈されて海上を十時間程漂流して溺死寸前に全く未知の部隊の人達に戸板の上に乗せてもらい海軍の救助船が来るまで助けられた事。

第二回は北ボルネオにて病院が危険になって密林を五〇日余移動した時に、最初患者を担架にかついで行き疲労して自分は行き倒れになると思っていた時、隊長が「中嶋は司令部の命令受領者に出よ」と言われて、最高指令官の少将の側近にいて自己の部隊との連絡係になった為に、担架から解放されて助かった事です。この移動の時衛生部隊は六〇名の中で十六名だけが生還できた。その一人だったのです。隊長の命令一つで生死が分かれたのです。

第三回は昭和二十一年四月末に復員して、栄養失調の身体を故郷で病臥中の或る日に往診に来られた先生が帰ろうと家を出るときに、私は痰が咽喉につかえて呼吸が止まってしまったのです。枕元に居た父が急いで先生を呼び戻して人工呼吸をしてもらい、私は大きく嘔吐して息を吹き返したのです。もし医者が帰ってしまつたらでは死亡してしまつたと言われました。

このように三度も死に直面しつつも助けられて来たことを思うと神様の大きな恵みの故であると感謝しております。

詩篇二三編は有名な聖句ですが、私は全くこの聖句通りだと思っております。次の聖句にも励まされています。

す。

主に望みをおく人は新たな力を得／鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。

(イザヤ書四〇章三一節)

2006年10月26日 祈祷会

証詞

あかし



雪江 美昭

私がキリスト教と出会ったのは終戦後間もない朝日町公会堂での、愛宕町教会の夜の伝道集会でした。森山牧師の熱弁……愛したいが愛せない、私の中に住んでいる罪。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」(ローマ人への手紙七章二四〜二五節)。公会堂一杯の会衆の感動に満たされたその夜の出来事を昨日のように覚えております。以後、愛宕町教会の集會に励むようになりました。

次に鈴木鶴代先生との出会いがありました。愛宕町の一角に鈴木先生の住居を利用し三角屋根の二階屋で十四、五名の集會を毎週守りました。若者が多くCSも熱心に開かれておりましたが、小さな群れの中心として鈴木先生の祈りは徹頭徹尾、祈りに明け、祈りに暮れる清貧の日々でありました。

一九五二年、愛宕町教会で小原十三司牧師からバプテスマを受けました。洗礼決心の際、本気で死を恐れぬ覚悟を自問自答したものでした。

間もなく愛宕町教会第一次会堂建築が達成され本格的に教会形成が進められましたが、私自身の正直な祈りは、私には罪がわかっていないの告白でした。以下に、多くの人々の中で特に心に残った出会いを記したい。

信仰の成長とは、人生の柵の中を様々な鎖を断ち切り、切られながら最後の一本だけイエス様に繋がること。主は決して侮るべからずとは老牧師の口癖であった。信仰は九九％か、百％かのどちらかである。と、亡き父親に励まして下さった教会役員言葉等。

「信じ切れるか、切れないか」北牧師との出会いは神を神とする正しい関係の交わりにつける御言葉でした。「神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです」(コリントの信徒への手紙一 一章三〇〜三一節)。

義をもつて裁ききることの出来るお方と、愛をもつて赦しきることの出来るお方の十字架の奥義にこめられた贖罪の出来事は、私の信仰生活をめざめさせるものでした。神との和解と題するオズワルド・チェンバース牧師の一文を紹介して贖罪の業に目をひられた喜びに感謝の意を表したい。

神は罪を知らない方を私たちの代りに罪とされました(コリントの信徒への手紙二 五章二二節)。罪とは、生来のものである。それは道徳的に悪を行なったかどうかという問題ではない。私達は、本質的に心理からそれた存在である。罪は、私たちを神に服従させない。キリスト教信仰はすべてのことについてその根拠を否定したい罪の性質に置く。この生まれながらの罪の問題に対処できるのは聖書だけである。他の宗教は道徳的な罪だけを扱う。イエス・キリストが立ち向われたのは、人々の中にあるその罪の遺産であった。私達の福音のメッセージに力がないのは、私達がこの罪の遺産を無視しているからである。イエス・キリストは、私たちの肉体的な罪を負われたのではない。誰も触れることの出来ない罪を負われたのである。聖書はこのことを明らかにしている。罪人を聖徒とするために、神はご自分の御子を罪そのものとされたというのが聖書の一貫した主張である。彼は

人類全体の罪をご自分の肩に負い、それをご自分の人格をもって受け止められた。神は罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。イエス・キリストが人類を復興された。彼は人類を神が望んでおられるところに連れ戻されたのである。今や、誰でも、十字架の上で成就された主のわざを土台として、神との交わりに入ることができる。人は自分自身を贖うことができない。贖いは、すでに終了したものであり、完成されたものである。それが個人のものとなるのは、個々の人がそれをもつて受けて入れたかどうかにかかっている。自分のものとして受け入れましょう。ハレルヤ!

2007年2月22日 祈祷会

証詞

あかし



長田 貞子

イエスは言われた。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたを愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

(マタイによる福音書 第二二章三四〜四〇節)

讃美歌 三五九番

1、夕日はかくれて 道なお遠し

行末いかにと 思いぞ煩らう

※わが主よ今宵も 側方にまして
淋しきこの身を はぐくみ給え

- 2、したしき友みな 先立ちゆきて
小暗きうき世に われのみ残る ※
- 3、人生の夕影の 移ろいゆけば
いこいの宿りも 近くやあるらん ※
- 4、み旨によりつつ 眠らせたまえ
常世のひかりに 目覚むる日まで ※

二〇〇七年一月で満八〇歳になった私です。愛宕町教会員になって八年です。北先生の聖書の説き明かしの深さに、役員の皆様の教会運営や将来への熱意、教会員の皆様の愛のあふれる交わりの温かさに支えられて礼拝を守って居ります。証しと言える程のものではありません。高齢になると誰でもそうでしょうが、つい先程の事は忘れても昔の事ははつきりと覚えています。私の生きた道を、幼い日からのことを思い出して辿りたいと思います。

私は今の北杜市須玉町で生まれ、小学校六年まで故郷の山や川に親しんで過ごしました。特に父の生家が県境増富温泉の近くでよく遊びに行きました。増富ラジウムの金泉閣は親戚であったので弟達や従妹達五・六人で歩いて行き自炊をして山歩き等しました。山道を二〇分位歩くと、急に空が広がって東に岩々の重なり合う瑞牆山が現れました。夏の朝涼しい中に出かけたので、丁度東の山が明るくなり岩山が光に輝いて辺りは光の洪水のようでした。その光に六人は立止まり自然に手を合わせました。何もわかりませんが、その時のことは、いつ迄たっても忘れません。これは小学校六年生の頃でした。

六年生卒業後の進路は受け持ちの先生の薦めと父母の励ましにより、昭和十四年四月、山梨県立甲府高等女学校に入学しました。受験の時もそうですが中央線で甲府駅まで来て、それから二〇分歩く学校でした。今の文化ホールです。父と共に日の春駅まで歩きました。私は他の友人と共に韭崎の女学校を希望したのですが、先生や父母の言葉に従いました。父の弟が学校の近くで電気商を営んで居り、ここに住むようになったのも父の計らいでした。

学校は快適で、三年間は忽ち過ぎ、昭和十七年、最終学年の四年になる前の春休みに風邪をひき甲府の医者に行くと、乾性肋膜炎という事でした。親戚の家の下宿の二階に毎日、医者が往診してくれましたが、熱が下がらず、ただだるく眠くて、一学期を病床で過ごし、夏休み近くに家に帰って静養し、時々バスで韭崎の医院へ注射に行きました。

或る日の午後、まだ熱も下らず床についていました。母の生家の祖母がブドウを持参して見舞いに来ました。手拭で汗をふいてくれながら、その時「お前は病気で苦しんでいるのに、余計な事を言われて可哀想だ。気にしないで体を治すように」と言ったのです。私には何のこともわかりません。後でわかったのですが、その頃、田舎の小学校から甲府の女学校へ行っている人はなく、お医者さんの娘さんでも、村長さんの娘さんでも韭崎の学校や、峡北の学校へ行っていました。私が時に散歩する姿や、バスで通院するのを見て、学校でよからぬ事があつたように言われたのです。私は驚きました。何も心当たりもないのに、こんなことを言われるなんて、世の中は恐いものだと思います。二学期になり病状も快復し学校へ行きました。学校には何やら事件があり退学者も出たとの事でした。

校庭には松林があり、春は桜咲き、夏は山鳥のさえずりを、涼しい風に松林の木陰で体操など休み、読書などしましたが、どうしても頭に入りません。人に疑われた悲しさ、恥かしさで、十七歳の私はすっかり打ちひしがれました。その時、同級生のオギハラケイコさんがこう言いました。「私と一緒に教会へ行きましょうよ」。そして、幼子を抱くマリア様のカードを握らせてくれました。

日曜日、友と一緒に百石町教会に行きました。鈴木鶴代先生のいらつしやる教会の扉は一杯に開かれ壁に大きな聖画が貼られていました。子羊を抱くイエス様の優しいまなざしに打たれました。ああ私はこの迷える子羊なんだ。イエス様はこんなに大事に一匹の羊を見つけて下さるのだと私は立ちすくみました。毎週礼拝に行き、日曜学校の子供たちとクリスマスを楽しく過ごした思い出もあります。

それから三年経ち、甲府空襲で教会も学校も焼けました。私は学校卒業後、女子挺身隊として電気通信の仕事

を二年して終戦になり、故郷へ帰りました。峡北伝道館に昭和二一年頃から通いました。ここに中嶋さんもいらつしたのです。

清里に清泉寮が出来、教会も出来ました。中央線小淵沢駅から小海線に乗り換え、この教会は聖アンデレ教会と言いました。私は昭和二四年、富士見教会の興水先生により故郷の須玉川で受洗したのです。

登美の中継所の女子寮に住み勤務していた時、敷島の伯母が訪ねて来られ、ここなら三〇分位で通勤できるので家から通うように勧められました。食糧難の時代であり、農家で養鶏もしていた伯母の家にお世話になり、二年足らずで終戦を迎えたのです。この家には中支派遣軍として戦争に行っていた一人息子がおり、三年半蘇州へ行っていました。昭和二五年、一緒に住んでいた伯母の計らいで、この人の所へ嫁いで参りました。現在に至っています。

子供を背負って荻野さんのおばあちゃんの家集會に行つた際、鈴木顕栄牧師様や恩師、雨宮与志先生にお逢いしました。

慣れない農業に従事しながら、老いた両親と三人の子供の家庭生活が続きました。町のこと、地域のことにかまけ、思いながら教会に来ることは出来ませんでした。が、いつも讃美歌を口ずさみ、好きな聖書の箇所をくり返していました。三人の子供が小さな手を合わせ、食前の祈りをするのを見つめ、喜びを感じていました。

小学六年の夏休み、瑞牆山の頂から、あたり一面にひろがる光の洪水に心打たれた六人の中、三人が受洗し、現在も教会とのつながりを持っています。従姉の皆川妙子姉は女子師範（梨大）時代、神谷先生と同級生であり、峡北伝道館のオルガン奏者をされ、弟の豊造さんは、ここで結婚式を与かりクリスチャンホームです。中嶋さんも同じです。幼い日、山の頂からあたり一面に降り注がれた光に心打たれた六人でした。ちなみに従姉は現明野村は昔の「朝神村」であり、私の村は「若神子村」であり、どうしても地名の由来を知りたくて市役所へ二人で行つた事もありました。

昨秋、長女恵利子に先立たれ、悲しみに打ちひしがれ

ていましたが、これも神の深い御計画であると気付いた時、教会に繋がる身の幸いを思い、これからも主の御手に引かされて八十路の坂を辿って参りたいと思います。ささやかな証でした。

60周年記念誌に寄せて

御言葉に支えられた 日々のあゆみ



荻野 勉・美枝

◎二〇〇五年九月 胃癌の発症が判明

十一月四日「悪性の癌」であると診断。
北牧師に祈って頂きました。

あなたの重荷を主にゆだねよ／主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え／とこしえに動揺しないように計ってください。（詩編五五編二三節）

手術は翌年一月二四日と決定。病院で手続きを済ませる。

◎二〇〇五年十二月十五日
和 誕生（長男光の次女）

◎二〇〇六年一月二三日

明日は入院して手術という日の真夜中十二時三〇分、
脳梗塞発症、緊急入院。
二四日朝、北牧師、祈ってください。

主は助けを求める人の叫びを聞き／苦難から常に彼らを助け出される。主は打ち砕かれた心に近くいまし／悔いる霊を救ってください。主に従う人には災いが重なるが／主はそのすべてから救い出し骨の一本も損なわれることのないように／彼を守ってください。（詩編三四編十八〜二十一節）

◎二〇〇六年二月二〇日

石和甲州リハビリ病院へ転入院。

◎二〇〇六年五月二一日

中央病院へ、癌手術のため再入院。

◎二〇〇六年五月二九日

手術を前に北牧師、祈ってください。

主は倒れようとする人をひとりひとり支え／うずくまっている人を起こしてください。ものみながあなたに目を注いで待ち望むと／あなたはときに応じて食べ物をくださいます。すべて命あるものに向かって御手を開き／望みを満足させてください。主の道はことごとく正しく／御業は慈しみを示しています。主を呼ぶ人すべてに近くいまし／まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし主を畏れる人々の望みをかなえ／叫びを聞いて救ってください。主を愛する人は主に守られ／主に逆らう者はことごとく滅ぼされます。わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは／世々限りなく聖なる御名をたたえます。（詩編一四五編十四〜二十一節）

時々の不安を御言葉に支えられて乗り越えさせてくださいました。

◎二〇〇六年五月三〇日

第一回手術、午後二時〜六時三〇分。

◎二〇〇六年六月七日

第二回手術、午後二時〜四時。

◎二〇〇六年六月十四日

石和甲州リハビリ病院へ再入院。

◎二〇〇六年八月十九日
退院。

通院しながらリハビリに励む日々。右半身不自由ですが、神の恵みに生かされている日々を讃えます。

わたしの救いと栄えは神にかかっている。力と頼み、避けどころとする岩は神のもとにある。民よ、どのような時にも神に信頼し／御前に心を注ぎ出せ。神はわたしたちの避けどころ。（詩編六二編八〜九節）

◎二〇〇七年四月十一日

胃癌再発。

再入院と言われた時は、少なからずショックを受けたけれど、主人も私も静かにすべてを主におまかせして受け入れることが出来ました。

父がその子を憐れむように／主は主を畏れる人を憐れんでくださる。（詩編一〇三編十三節）

◎二〇〇七年四月二五日

退院。

しかし、ソケイヘルニアが最悪の事態になり五月八日再々入院。ワーファリンを止める間もなく十日に緊急手術。

しかし、神はわたしの祈る声に耳を傾け／聞き入れてくださいました。神をたたえよ。神はわたしの祈りを退けることなく／慈しみを拒まれませんでした。（詩編六六編十九〜二〇節）

生命が守られ、はらからと共に礼拝を守ることが出来る今……感謝で一杯です。

七〇周年に向かって歩みます。

※「愛宕町教会設立六〇周年記念誌」に「寄稿いただきましたが、誌面の都合により、今号「いずみ」に掲載といたしました。」



二〇〇六年度夏期伝道実習報告

「ヤーウェ・イルエ

ー主は備えてくださる」

東京神学大学大学院一年 齋 藤 真 行

主の御名を賛美いたします。主の導きのもと、愛宕町教会にて実習することがゆるされましたことを、心より感謝申し上げます。本当に、多くの方々に支えられた実習でした。多くの方々の声や顔が思い浮かびます。心に刻まれた出来事が目の前に現れてきます。与えられた一つひとつのことを思い起こして、感謝を申し上げます。

この実習にて、根本的に自身自身の信仰も歩む姿勢も問われました。北先生の指導のもと、牧師として歩んでいくのに必要な姿勢、備えておくべき思いが叩き込まれました。しかし、指導が進めば進むほど、私は自分がいかに牧師にふさわしくない者か、思い知らされるばかりでした。北先生の要求される資質や姿勢は、私にほとんど欠けていました。そして、あるときすっかり碎かれてしまつて、「もう自分は牧師になることはできない」と思うところまで追い詰め

られました。そのとき、私は「神様、私はいつたいどうすればよいのですか」と祈りました。牧師となるのにあまりにふさわしくない自分のことを神様に訴えました。すると、どういふわけかそのとき心の深いところに、自由を感じました。そのときまで、私は心のどこかで、自分には牧師ができる、と思つていました。その心のおごりが、自身により頼むように、常に私を誘つていました。説教をするにも、交わりをするにも、いつも自分を頼りとしてきました。ところが、「自分には牧師はできない」と悟ると、神様に頼る以外にはないのだということ、自分にはできないことも、神様にはできるということに気づかれました。耳を打つだけの言葉や理論としてではなく、生きる実感として、そのことがわかりました。そして、牧師として生きていくのに必要な資質や能力に欠けている、ふさわしくな

い自分であつても、なお召されたのは神様なのだ、という原点を確認させられました。これは、私には回心にも似た経験でした。そのとき以来、私は以前よりもずっと自由になりました。自分により頼んでいるときは、人を恐れて神を恐れていませんでした。しかし、「自分にはできない」とわかると、人への恐れはだんだん消えていきました。

また、北先生に指導していただくなかで、説教の準備の仕方にも変わりました。以前は「自分の知っていること」を用いて説教をしていました。自分の知っている神学や思想を福音と勘違いしていました。そして、聖書の言葉にそういう自分の思いを読み込む、という間違いを犯していました。ところが、説教は聖書に記されている事柄を語るものであつて、説教者のうちにあることを語るのではない、と教えられました。そのとき、聖書の語っている事柄を求めて苦闘する、という基本的な説教の準備の仕方を学ぶことができました。自分のことを語るのではなく、聖書の証しするイエス・キリストを語る、ということの困難と喜びを、わずかではあるかもしれませんが、味わうことができました。これまで、このことは言葉として、理論としては理解していました。しかし、自分の生きるべき切実な現実としては感得していなかったと思います。しかし、この実習を通してそのことを少しであつても実感することができました。このことは、この実習におけるすばらしい恵みでありました。

いま振り返ってみますと、与えられた恵みの数々にもかかわらず、それに応えていない自分、あまりにもいろいろなことができない自分に出会うばかりの実習でもありました。しかし、自分の限界や欠点を思い知らされるなかで、繰り返し神様を呼ぶことを教えられました。そして、神様を呼ぶなかで、自分のふがいなさ、情けなさにもかかわらず、神様は私を見捨てられることなく、常に何事においても備えてくださった、といま心に深く思うものです。「ヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）」という言葉は私が最も愛するものの一つで、主日説教もこの個所でやりましたけれども、この言葉をこの実習を通して、改めて受け取りなおせられました。説教ができずに頭を抱えて時計の針が動くのを眺めているばかりでいたこともあり、疲れてしまつて体が動かないのに、あと三時間後には祈禱会の奨励をしなくてはいいけない、しかもまだ原稿ができていない、ということもありました。しかし、不思議なことに力がどこからかわいてきて、気がつくとき机に座つて聖書を読んでいる自分がいました。そんな経験が繰り返し与えられました。主の恵みに生きるとき、まさに「ヤーウェ・イルエ」は現実そのものだ、と強く思わされました。

実習の間、私のために祈ってくださり、家庭集会の場合を備えてくださり、また他にも様々にお支えくださりまして、本当にありがとうございます。この実習で受けたものを、これからさらによく考え、試みることを通して、深めていきたいと思ひます。愛宕町教会のみなさまのことをおぼえて、私も祈らせていただきます。

最後まで見守り、すばらしい指導をしてくださいました北先生、ありがとうございます。支えてくださいました眞智子さん、ありがとうございます。CSのみんな、ありがとうございます。この夏のことを忘れずに、与えられた道を走っていきます。また会う日まで！

楽しい!!
おいしい!!

2007年も元気いっぱい楽しんでます!

ハレルヤ子どもクラブ

3 24 土曜日

もちつき&
じゃがいも植付け



お天気にも恵まれ、春の到来を感じさせる暖かな穏やかな日でした!

5 19 土曜日

ますつり&
バーベキュー



釣ったばかりのサカナをさばいて、塩をふって、串にさして...
さあ! 焼いています!

教会学校だより

6 16 土曜日

「はまなし寮」慰問&
じゃがいも収穫



午後からは畑仕事。立派なじゃがいも、とれました!



河口湖「はまなし寮」で人形劇を披露。花の日にちなんだ花束を贈呈しました。



7 14 土曜日

サマーフェスタ



プラバンづくり、愛宕町教会名物「たご焼き」、かき氷、綿あめなどなど

これからの予定 …… 奮ってご参加・ご協力・ご加祷ください。

★ 9月8日(土)・9日(日) 教会全体研修会

講師/近藤 勝彦 先生(東京神学大学教授 組織神学)

《8日》 講演Ⅰ/「宗教的寛容と伝道」

《9日》 主日礼拝/「信仰生活の揺るがぬ確信はどこから」ローマの信徒への手紙 第2章1〜5節

講演Ⅱ/「環境問題とキリスト教」

★ 10月21日(日) 午前11時30分〜 第25回 教会バザー

編集後記

▼今年はなかなか梅雨がこないと思っていたら意外にも長雨、九州では台風の被害、新潟では地震など自然の猛威の中でつらい思いをされている方々のニュースが伝えられる度に心が痛みました。一日も早い復興に至るよう主に慰めと平安を祈るものです。

▼先日フィリピンへ行ってきました。町には立派なカトリック教会が目につきました。それと同時にプロテスタントの教派と思われる巨大な同じデザインの新しい教会をあちこちで見つけました。聞いたところ、プロテスタント教会ではなく今猛烈に勢力を拡大している新興宗教とか。本物のキリスト教離れでしようか? 日本ではどうかと考えさせられました。

▼愛宕町教会は60周年を迎え皆様の協力により立派な記念誌が出来上がりました。見てみると本当に主にあつてさまさまな取り組みをしてきたと感謝でした。理想的駐車場の土地も取得可能となりました。これから何が出るかと考えると心が躍ります。

(清藤記)